



第18回国際視野学会会長の松本長太先生

誘致

野学会のレポートを書くことを、どうかお許し願いたい。

最初に取り掛かったのは、ポータル開催の『第17回国際視野学会』でPRに使う誘致用DVDの製作だ。岩瀬愛子先生（岐阜県・多治見市民病院副院長）を通じて映像会社とコンタクトをとり、作業を開始した。まず、われわれが脚本と絵コンテを作成。それを基に映像が具体化されていく。インターネット上での公開も視野に入れていたこともあり、DVD中の写真と映像の出版および挿入楽曲や登場人物に関して一つ一つ許可をとり、エフェクトも丁寧に作りこんでもらった。これまで日眼総会などで流されていたあの映像を、ご記憶の方も多いはず。

段取り

ほっとするのも束の間、学会運営会社とのミーティング。これからは、奈良での学会まで果てることのないデス・レースが始まる。やるべきことは無限にある。最も重要な予算編成はもちろん、会場設定、各種団体や企業への協力依頼、参加者宿泊関連、会場アクセス手段関連、コンgresキットの企画製作、加えて国際

学会であるだけに国際視野学会との綿密な連携とWEBレジストレーションの確立、肝心の演題募集と受け付け、採否の決定など……。そして何より松本学会長のスーツ新調だ。中でもこだわったのが、学会会場である。会場となった奈良県新公会堂には能舞台があり、これまでも多くの国際学会で使用されてきた。日本の伝統ともいえるべき古典的な舞台設定は、海外からのゲストにとつて極めて魅力的。われわれの狙いもそこにあった。もうひとつは、抄録集とコンgresキットだ。抄録集の表紙には和紙を採用し、奈良の写真も織り交ぜるなど、すべてにおいて日本的要素を取り入れた。コンgresバッグは藍染めの手持ち鞆とし、絵柄は日本の伝統的デザイン4種（青海波、扇、山草、円）を採用した。また奈良の鹿と興福寺の五重塔をモチーフにした手ぬぐいも加えることに。そして輪島塗のUSBメモリ、これには、可児一孝先生（川崎医療福祉大学教授）が持ち前の、これまでの国際視野学会の学会抄録集と膨大な記録写真を取り込んだ。国際視野学会の歴史が収められたUSBメモリは、その後、参加者に変身した。それは言うまでもない。

さて、この学会の成功と学会長の今後の生活設計を左右することになるのが予算である。歳入と歳出のバランスを鑑み、絶対に赤字にならない

「第18回国際視野学会」

こういった準備段階のさまざまな難関を乗り越え、ついに学会が始まった。期間中は天候にも恵まれ、会場における討論の熱気とともに、奈良は汗ばむほどの陽気となった。

参加登録した人数は海外、日本を合わせて2000人を超え、演題数は講演とポスター発表を合わせて60題に達した。そのうち日本からの演題



コンgresバッグの配布



奈良・日本文化の粋を披露 第18回 国際視野学会を主催して 最新の潮流を説く特別講演が ハイライトに



奈良県新公会堂
能舞台のある会場と玄関

奈良の5月といえば、鮮やかな新緑に包まれ、穏やかで優しい風が吹くとても過ごしやすい時期だ。観光客や修学旅行生の訪問も多く、観光地一帯は大変賑わう。この古都・奈良で、2008年5月21日から24日まで『第18回国際視野学会』が開催された。



近畿大学
まるやま こういち
講師 丸山 耕一

はじめに

まずは学会が開かれるまでの経緯を書かねばならない。話は3年前にさかのぼる。

ある日、松本長太准教授が私を部屋に呼び、唐突にこう言った。「2008年に国際視野学会を誘致することになりそうだ。日本視野研究会が中心となり、近畿大学が実務を担当することになる。君は医局長だから学会運営をやるように。だから2006年に米国・オレゴン州ポートランドである国際視野学会に出席して、そのノウハウを勉強すること」と。

「視野」についてはド素人である私（専門はぶどう膜）に対し、視野の学会に出席せよ、なおかつ日本開催の学会運営を担当すべし、と言われたのだ。「医局長だから」とは、全く理由になっていないし、これは荷が重い。しかし、近畿大学眼科が開講して以来、初めての国際学会主催である。催すことになれば、誰からも後ろ指を指されない立派な学会にせねばならない。ならば、と覚悟を決め、気合を入れて準備に入ることにした。

なお、このレポートでは視野に関する学術的な内容を、正直、まともに書く自信がない。多くの先生方からお叱りを受けるかもしれないが、視野とはまるで縁遠い人間が国際視

提供は32題にのぼり、いつにもまして賑やかな学会に。また、モーニングセミナーやランチョンセミナーも国内外のエキスパートの先生方により連日、開催された。

本学会は、各施設における視野にかかわる最新の基礎ならびに臨床研究が披露される場であり、例年のごとく、熱く活発な討論が行なわれた。



IPS Lectureでご講演のFritz Dannheim先生



Aulhorn Lectureでご講演のAnders Heijl先生

その中でも目玉は、やはり特別講演、IPS LectureやAulhorn Lectureだ。それぞれ、Fritz Dannheim先生が歴史的背景を交えた視神経乳頭の画像解析を、Anders Heijl先生が緑内障進行過程における視野検査の有用性と測定結果の理解についてを、最新のトレンドを交えて講演された。そのほかにも今回、同時通訳を導入したことは、講演、討論などで若い先生方をはじめ多くの参加者に有用であったと思われる。

さて、国際学会という性格から、さまざまな催しを行なった。学会初日、新公会堂に隣接する美しい日本庭園でWelcome Partyを開き、参加者には食事のほかに和太鼓の演奏を楽しんでもらった。雨もなく過ごしやすいたべとなり、多くの方々に満足していただいたようだ。

2日目の一般講演終了後には、有料でJapanese Dinner Partyを催した。まずは東大寺の東に位置する若草山の頂上までバスで上がる。すると眼前には180度以上の視界が開け、眼下に興福寺の五重塔を見ながら古都の風景が堪能できるという寸法だ。その後は、料理旅館に場所を移し、食事と琴の演奏を楽しみながらのひとときとなった。

学会の催しの目玉の一つとして、ホルンを吹いて鹿を呼び寄せる「鹿寄せ」を企画。ところが、あるTVドラマの人気により「鹿寄せ」にた

くさんの観光客が集まるようになったため、鹿が怖がって顔を出す頭数が減ってしまったという。準備を進めていたわれわれスタッフは、それを聞いて不安に駆られた。そして学会3日目、早朝から飛火野に集合。

ホルンが吹かれた。が、何も起きない。一頭も出てこない。固唾を呑むとはこのことか。冷や汗が額をつたう。ところがその直後、森の中から列をなしてたくさん鹿がこちらに駆けて来るではないか。その光景を見て参加者は皆、大喜び。鹿せんべいをねだられ、涎をかけられ、中には服を噛まれる参加者もいた。

午後からは能舞台において、国際公演などで活躍されている方々に演奏をお願いし、能を演じていただいた。前半は能の演目についての説明と参加者が能面を着けるパフォーマンスがあり、後半は「羽衣の舞」を鑑賞。海外の先生方が日本の伝統芸能に触れるよい機会となった。

続いてはWalking Tourを開催。英語、ドイツ語、スペイン語、そして日本語の通訳スタッフに付いてもらった。東大寺本殿、二月堂、そして春日大社を少人数に分散して巡ること。5月だというのに気温30度近くの炎天下に、止めどなく吹きだす汗をぬぐいながらの行軍である。皆、ヘロヘロになっていたようだ。が、それでも世界遺産を目前にして、その荘厳さに感動していたに違いない。

と思う。

最終日のトリはClosing Banquetである。まずは、学会特製の法被を着た学会長をはじめとする面々による鏡開き。司会は本学の有村英子先生である。例年、パーティーではIPSミーティングの伝統とも言えるべき各国対抗歌合戦が繰り広げられる。毎年、日本が一番派手であり、アトラクションを用意している。他の国々の方も楽しみにしてくれている。今年は木村泰朗先生（東京都台東区・上野眼科医長）の総指揮の下に「さくらさくら」幸せなら手をたたくこう」を日本の参加者全員で合唱。その後のアトラクションは岩垣厚志先生（大阪府八尾市・岩垣眼科副院長）と本学の橋本茂樹先生による殺陣。IPS会長のMichael Wall先生にも加わっていた。刀を振ってもらった。参加者は皆、テーブルを囲んで時を忘れて語り、松本学会長の感謝の言葉まで充分に楽しみ、最後は三本締めでお開きとなった。

御礼

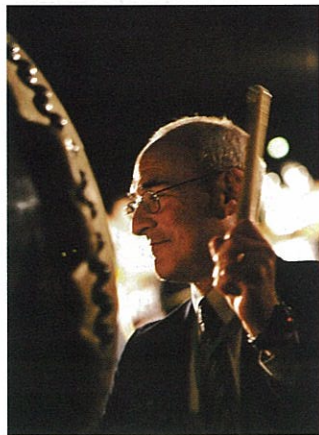
4日間にわたる『第18回国際視野学会』は、それほど大きなトラブルもなく無事に終了した。参加者の方々からは「今までのミーティングの中で、最高のホスピタリティであった」と、お褒めの言葉を頂いた。松本学会長の新調されたスーツも好評だった（実は、靴もベルトもネク



Welcome Party
奈良新公会堂を背景に



Walking Tour
東大寺本殿を訪れて



Welcome Partyで太鼓を叩く国際視野学会会長のMichael Wall先生



「鹿寄せ」で森から飛び出してきた鹿たち



鹿せんべいを与える吉川啓司先生(左端)をはじめとする参加者



能舞台「羽衣の舞」



Japanese Dinner Partyで琴を試す国際視野学会副会長のChris Johnson先生(中央)

おわりに

今回は、2010年にスペイン領カナリア諸島で開催される予定だ。また、IPSの名称はInternational Perimetry SocietyからImaging and Perimetry Societyに変更された。飛躍的な進歩が続いている眼底画像解析と最新の各種視野測定に代表され

る機能的検査が、いまやシームレスな関係となっている。さらなる視野研究の発展を遂げるためにも名称変更が適切との考えによるものである。

さて、2年後、視野にかかわりのないぶどう膜専門の人間が、どうすればカナリア諸島に行けるのか、悩みは増すばかりである。

(写真は可児一孝先生ならびに(株)ホール・クリエーションから提供していただきました)

醸し出される空気に幸せな気分

東京都港区・赤坂北澤眼科

院長 北澤 克明



5月21日から24日まで奈良県新公会堂で開催された『第18回国際視野学会（IPS）』に出席した。

IPSに出席するのは2002年にイギリスのStratford-upon-Avonでの第15回以来、6年ぶりのことであり、IPSがどう変わったのか、期待とともに一抹の不安を抱いて会場へ向かった。

welcome receptionで旧知の方々が皆さん年を重ねられていて、一瞬戸惑うこともあったが、もちろん、これはお互いさまのことである。1992年の京都での第10回国際視野研究会に海外から来られた方で、今回も参加された方は数えるほどで、改めて歳月の経過を感じさせられた。

しかしながら、学術講演が始まってみると、視野とimagingという、かなり特化した領域の研究者の集まりであることから醸し出される空気には変わりはなく、講演、討論に終始気持ち良く耳を傾けることができ、幸せであった。

屋外でのwelcome reception、ホテル日航奈良でのfarewell partyも和気藹々と進行し、farewell partyでは本学会のホストである近畿大学の下村嘉一教授、松本長太准教授をはじめ、教室の皆さんの開催に当たってのご努力とhospitalityに対して、称賛と感謝のstanding ovationが尽きなかった。

『第18回 国際視野学会』に参加して

繊細かつ緻密な準備で成果を

岐阜県・多治見市民病院

副院長 岩瀬 愛子



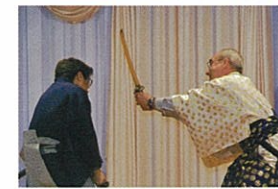
2年前からの準備が実り、近畿大学の主催で行なわれた今回のIPSは、各国からの参加者の評判も良く、その感想は「日本らしい伝統と細やかさ」のある「センスの良いIPS」という意見とともに、学会内容と同時に素晴らしいhospitalityに感謝したものが多かった。

2年前のポートランドでのIPSで日本の会場の紹介ビデオが流れた時は、その内容の美しさと繊細な映像に会場では拍手が鳴りやまなかったほどであった。これは、近畿大学スタッフの並々ならぬ気の入れようの賜物であったが、学会までの

準備期間における同スタッフのスタンスには、同様な「繊細さ」「緻密さ」があり、結果、学会本体の運営も素晴らしいものとなった。

IPSは、視野と画像の学会として、正式名称もロゴも変わり、今後、さらなる発展をめざすが、この大きな節目の時に日本で開催できたことは、大変喜ばしいことであった。なお、準備期間のビデオ製作および学会期間の映像を担当してくれた(株)ホール・クリエイションのスタッフにも、この場を借りて感謝を申し上げたい。

Michael Wall 先生も殺陣に参加



橋本茂樹先生と岩垣厚志先生によるパフォーマンス



松本学会長（左端）の音頭で鏡開き



テーブルを囲んで「Kanpai!」



左より、可見一孝先生、勝島晴美先生、溝上國義先生

Closing Banquet



「鹿の角」を着けて日本チームの合唱

『第18回 国際視野学会』を終えて

2年に一度、世界のどこかで開催されるこのIPSは、その開催国の特色豊かでお洒落な social event が、ほぼ毎日のように催されるという、日本人にとってはとても異色で刺激的な学会です。学会最終日には、各国の歌やパフォーマンスを披露しながらのバンケットで締めくくられます。とてもフォーマルかつユーモアあふれる学会です。

それが日本で!! とても気の重くなるお仕事です...などと言ってはおりません。「何とか成功しなくては」と、松本長太先生、丸山耕一先生を筆頭に大忙しの毎日となりました。今回の学会の開催地は松本先生の愛する home town「奈良」、コンセプトは「純日本」です。しかし、純日本でありながら、当然お洒落でなくてはなりません。コングレスバッグやその中に入れる小物をはじめ、パーティーグッズ、かわいい鹿角ゼイベント、奈良観光など、あれこれ相談しながら一つずつ（本当に細かな

standing ovationの
「優美」感動



堺市南区
近畿大学医学部堺病院
有村 英子

ところまで一つずつ）決めていきました。

そんなある日、私は松本先生からバンケットの司会を指名されました。あまりの驚きに、その日から2、3日眠れませんでした。英語がおぼつかないうえ、司会とは何か？の次元の私です。「無理です...」を連発する私の言葉を、頑固な松本先生は当然聞き入れてくれません。半泣きになりながら、岩垣厚志先生（先生は国内の学会でのパーティーの司会はもちろん、IPSでも有名です）の指導の下、泣く泣く準備を進めていきました。

バンケット当日、当然、いくつかのスケジュール変更もあり、かなりバタバタ!! 相当緊張していた私は自分の司会がどんな感じだったか、正直、あまり覚えていません。その中で、何より印象的であったのは、Chris Jones 先生のご挨拶の際に参加者全員から松本先生に standing ovation が起こったことです。今まで私が参加したIPSでは、見たことのない光景でした。本当に、この学会に多大なる努力をなされた松本先生をはじめ多くの先生方、スタッフへのご褒美だと、心から感動しました。

学会開催のおかげで、今まで知らなかった奈良の町とかわい鹿たちがとても好きになりました。しかし、やはりお気楽な観光が一番だと思うのでした。

今も変わらぬ at home な雰囲気

東京都中野区・東京医療生活協同組合中野総合病院

部長 鈴木 弘隆



第4回IPSに参加してから28年目になります。当時は、視野のことなど何も知らないまま、参加させてもらいましたが、気がつけば年だけは上のほうになりつつあります。

参加する顔ぶれも随分変わりました。しかし、学会のat home な雰囲気は今も変わりません。英語の不得意な私が参加し続けているのも、そんな雰囲気のためかもしれません。ただ、旧知のオランダの一行が今回は一人も参加していなかったのは残念でした。

IPSの会期中は、いつも朝早くから夜中まで講演、イベント、食事と、参加者がほぼ全員で行動する強行軍ですが、それがまた、大きな学会では味わえない楽しみかもしれません。

今回は、松本長太先生をはじめとする近畿大学の先生方のおかげで、古都・奈良での素晴らしいIPSに参加することができました。

今の視野は、数字ばかりが目立ってとっつきにくいかもしれませんが、多少とも興味がある方は、ぜひIPSへの参加をお勧めします。

『第18回 国際視野学会』に参加して

本当にお疲れさまでした

東京慈恵会医科大学

講師 中野 匡



IPSは毎回、参加者が200人以下で、ほとんどの先生方と4日間を共に過ごすディープでアットホームな学会です。このため、私のような語学が苦手な者であっても、すぐに著名な先生方と顔見知りになれる貴重な国際学会といえます。

発表は基礎から臨床研究まで多岐にわたり、いずれも突っ込んだ質疑応答が行なわれます。また学会場以外でも毎回、凝った催し物が企画され、大きな楽しみとなっています。しかし主催者側は大変で、今回の近畿大学の先生方は大いに思案された

ことと思います。

開催地が学会長を務められた松本長太先生のご出身地、奈良だったこともあり、毎日、何らかの形で日本文化の神髄に触れる機会を頂きました。最新の学問知識だけでなく、日ごろ忘れかけていた日本人としての誇りと気概を改めて感じた、とても有意義な学会でした。

また、最終日の晩餐会では恒例の国別対抗の出し物があり、今や日本チームの顔である木村泰朗先生指揮の下、「幸せなら手をたたこう」の大合唱となりました。

そして、大盛況のうちに学会を終えられた松本先生、医局長としてそつなく業務をこなされた丸山耕一先生をはじめ近畿大学の先生方、本当にお疲れさまでした。



左より、
私、木村泰朗先生、鈴木弘隆先生